ウンジャミ：伊是名城の大城ナーでの拝み

シヌグ：各戸を廻り祓いをする子供達

写真展

伊是名島のまつり

～ウンジャミ・シヌグ・豊年祭～

展示図録

豊年祭：
勢理客アシャギでのイルチャヨー神事

豊年祭：
棒術を披露する子供達がミルクの先導で入場

写真展

伊是名島のまつり

～ウンジャミ・シヌグ・豊年祭～

古典芸能研究センターの「沖縄祭祀資料データベース」では、この度、伊是名島のウンジャミとシヌグのデータを新たに公開しました。今回はそれを記念した展示です。

漁の守護をする海神を祀るウンジャミと悪疫や虫害を祓って豊作を祈るシヌグは、沖縄本島北部とその周辺離島で伝えられてきた祭祀です。伊是名島のウンジャミは一部の神事を除き行われなくなってしまいましたが、沖縄祭祀研究会による1980年の調査資料により、その様子を窺うことができます。伊是名島のシヌグの様子と、かつて旧暦７月17日に行われていたウンジャミの様子を、調査資料と写真に基づき詳しく紹介します。

あわせて、2013年の後追い調査時に取材した伊是名島の豊年祭の写真も展示します。豊年祭は別名「八月遊び」。夏をしめくくる一連の行事で、各種の神事の後は村内の各地区でさまざまな芸能が繰り広げられます。今回紹介する神事イルチャヨーは航海安全を祈る祭祀で、現在は伊是名島と隣の伊平屋島のみでみられる貴重なものです。組踊やエイサーなど、多彩な芸能の写真もお楽しみください。

（伊是名島イメーキャラクター）

伊是名島について

伊是名島の位置など

伊是名島は、沖縄本島の北西海上約35キロに位置する。この伊是名島を主島とする伊是名村は、総面積15,44キロ平方メートルで、伊是名島のほかに屋那覇（やなは）、具志川（ぐしかわ）、降神（うるかみ）という３つの無人島から構成されている。

伊是名島の周囲は16.7Km でほぼ円形を成しており、島の南東から北西へ向けて、城山・チヂン山・アーガ山・天城・大野山の山岳が連なっている（下掲地図参照）。これらを分水嶺として、東部と西部の海岸線へ緩やかな勾配をもって農耕地・集落が広がっている。

具志川島を挟んで北には伊平屋島がある。この二つの島は、明治40年（1907）までは古琉球・近世を通じて「伊平屋島」という名で一体の行政単位（＝「間切（まぎり）」）として扱われており、伊是名を「前地（メージ）」、伊平屋を「後地（クンジ）」と呼んでいた。

＊「間切」はもと琉球の行政区画。数ケ村からなる。明治40年（1907）、「村」に改称。

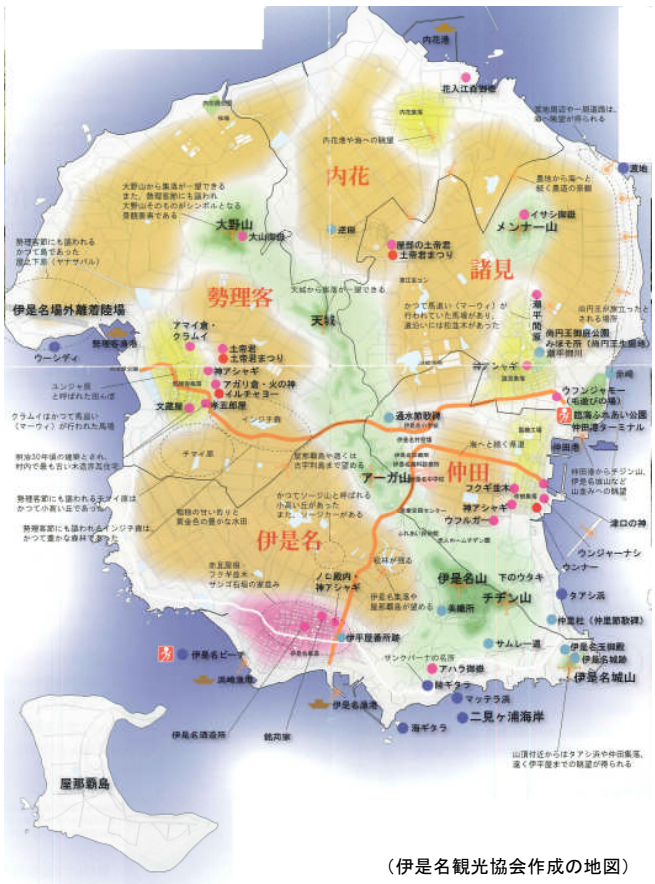
伊是名村について

伊是名村は、第二尚氏王朝の初代尚円（金丸）の出身地として知られ、後述するように、王の生誕にまつわる名所（御臍所・潮御平川）や一族の墓（伊平屋島玉御殿）、一門の名家跡（銘苅家住宅）などが史跡として保存されている。

伊是名島は、隣の伊平屋島とあわせて「伊平屋島」とされていた。「伊平屋島」は明治12年（1879）の廃藩置県に伴い沖縄県の管轄となる。明治41年（1908）には「伊平屋村」となり、番所・役場は伊是名島に置かれた。その後、昭和14年（1939）に伊平屋村が分村して、伊是名島が伊是名村、伊平屋島が伊平屋村となった。

伝統集落は、仲田（なかだ／なはだ）・諸見（しょみ）・伊是名（いぜな）・勢理客（せりきゃく／じっちゃく）の４つの字だが、昭和17年（1942）に内花（うちはな）が諸見から分立して５つになった。
ただ、伝統行事は現在もこの四集落で行われている。

＊「なはだ」「じっちゃく」は近世の文献に見られ、当地では現在も使われている。



（伊是名観光協会作成の地図）

伊是名島と尚円王

伊是名島は琉球国王第二尚氏の始祖・尚円王（1415～1476）の生誕地として知られ、琉球王国時代には、琉球王統発祥の地として王府直轄領とされていた。1429年から1879年まで450年続いた琉球王国の王朝は、初めて琉球を統一した尚巴志ゆかりの第一尚氏王統と、1470年以降に政権を担った第二尚氏王統に分けられる。尚円は、この第二尚氏の開祖となった人物である。

尚円王について

正史（＊『中山世鑑』『中山世譜』『球陽』）によると、尚円（金丸）は永楽13年（1415）、諸見（首見邑）に生まれた。童名は思徳金で、父は尚稷、母の名は不明。20歳で父母を同時に失い、農事に励んだ。24歳の時、干魃に際して他の田は干上がったのに、彼の田のみは水に不自由しなかったという。金丸が水を盗んだものと周囲の農民たちは疑い危害を加えようとしたので、金丸は妻と弟（第二尚氏の二代尚宣威王という）を連れて島を脱出し、国頭（くんじゃん）の宜名真（じなま）（現国頭村）に逃れた。27歳の時首里に上り、越来（ごえく）王子に仕える。王子が六代尚泰久王になると金丸は重用され、御物城御鎖之側（おものぐすくおさすのそば）（＊対外交易長官）となった。だが王の死後、息子の尚徳が即位すると、金丸はいれられず、公職を捨てて領地の西原間切に隠遁した。成化５年（1469）に起こったクーデターで第一尚氏王朝が亡ぶと、金丸は迎えられて王となり、「尚円」と号して第二尚氏王朝を開いた。尚円王は、先の王朝の方針を尊重しつつ新王朝の基礎作りに励み、７年後に死去した。

金丸が王となったため、姉の真世仁金（まぜにがに）は、「伊平屋の阿母加那志（あもがなし）」、叔母の真世仁金（まぜにがに）真世仁金は「二かや田の阿母」という神職を与えられた。叔父の真三良（まーじ）は招かれて真和志間切銘苅（みかる）村（現那覇市）の地頭となったが、目を患い、島に帰って「銘苅大屋子（めかるおおやこ）」となった。この三職は代々世襲されたが、叔母には２人の娘がおり、同時に二かや田の阿母職を継承した。姉は南風の二かや田の阿母（玉城家）、妹は西の二かや田阿母職（伊礼家）の初代となる。伊平屋の阿母加那志をアンジャナシー（アムナカシ、名嘉家）、その家をウドゥン（御殿）、銘苅大屋子家をミケルドゥンチ（メカルドゥンチ、銘苅殿内）と称するが、両屋敷は字伊是名に所在する。二かや田の阿母はタハダと称し、両家（フェーヌタハダとニシヌタハダ）は字仲田にある。王家ゆかりのこの四家はユトゥヌチ（四殿内）と呼ばれている。

また、尚円の生誕・遍歴の地となった伊是名島の各所や国頭（宜名真御殿）、西原（内間御殿）の旧跡は、近世に首里王府によって、国家的な聖地として整備された。

尚円王に係わる史跡など

伊是名島では、尚円金丸の生家跡地の「御臍所（みほそ）」（敷地内に置かれた石の下に尚円王の臍の緒が埋められていると伝える）や、誕生の際に産湯を使ったという「潮平川（スンザガー）」（潮平井）、さらに尚円の父母や祖先とユトゥヌチ関係者の遺骨を納める「玉御殿（たまうどぅん）」は、大切な場所として守り伝えられてきた。生誕の場所は、現在は「尚円王生誕御庭公園」として整備され、若き日の松金(のちの金丸）像が建立されている（＊村出身の版画家、名嘉睦稔氏作)。また、金丸が島民に誤解をされた田も「逆田」と名付けられ、史跡となっている。

1（諸見）尚円王御庭公園　尚円像

2（諸見）尚円王生誕地屋敷内
「御臍(みほそ)所」

3（諸見）尚円王御庭公園
「潮平井(スンジヤンカー)」

4（伊是名）伊是名城山の麓
「玉御殿(タマウドゥン)」

5（伊是名）銘苅家住宅

6 阿母加那志家（名嘉家）
位牌厨子

7 阿母加那志の拝領品
「緑地御玉貫(うたますき)」

（1～5：2013年9月13日撮影、 6・7：1980年8月25日撮影）

伊是名島の伝統行事

『琉球国由来記』の記事から

琉球王府によって1713年に編纂された琉球王国の地誌『琉球国由来記』（全21巻）は、琉球の「諸事由来記」(序文による）であり、各地の拝所、旧跡、年中祭祀を掲載する。伊是名島の年中祭祀（旧暦）は後掲の通り。☆を付した祭祀は公儀が、それ以外は島で日を決める。

1月	〔新年の行事〕（朔日・十五日） 「長月ノ御タカベ(*)」（2月）と 「三八月四品四度御物参」（3月と8月）について併記	7月	屋那覇折目 シノゴオリメノ事
		8月	☆柴差
		9月	☆作物ノ為ニ御イベ火神御前へ 御タカベ
2月	☆麦穂祭 田植ヲリメ（折目(*)）		☆麦初種子・ミヤ種子
		11月	☆粟豆初種子
3月	☆麦大祭		☆アラザウリ
4月	☆アブシバライ		具志川折目
5月	☆稲穂祭		海神折目
6月	☆稲大祭	12月	タケナイヲリメ
	☆年アメノコト ミヤロ折目		☆向ザウリ ☆鬼餅

各行事の項にはそれぞれの祭祀に伴う休日（「遊び」）の日数も付記され、さらに儀礼の際に唱える神託の詞「ミセセル(*)」や願立ての言葉「ノダテゴト」が記されているものもある。末尾には「雨乞ノ事」を立項し、雨乞いの儀式のミセセルで伊是名島の年中祭祀の項を閉じる。これらの行事のうち、現在も本格的に行われるのは6月の稲大祭、7月のシヌグ、8月の柴差くらいで、他は神行事だけが残ったり、あるいはまったく行われなくなっているというのが現状である。

今回とりあげたウンジャミとシヌグ、屋那覇折目は、現在ではいずれも旧暦7月の行事となっている。伊是名島の海神折目（ウンジャミ）については本書では11月の行事としており、7月に行われるようになった事情はよくわかっていない。祭祀の内容については、詳細は個々の祭祀の説明で述べるが、近年まではおおむねは変わらず伝えられてきたことがうかがえる。しかしながら、1980年の調査記録を検討すると、それ以降は特に、祭祀が急激に変容していることが感じられる。

＊御タカベ…ウタカビとも。奄美・沖縄諸島で祭祀の際に唱えられる祝詞。ノロ（祝女）や司祭者が唱える。語源は神を崇め奉る意の「御崇べ」である。形態は、対語・対句を重ねる、ある種の韻律を持った唱えごと。

＊折目（オリメ）…定期的に繰り返される暦日の単元をさす沖縄方言で、ウイミとも、シチビー（節日）ともいう。生産と結びついた季節の折目で、豊年祭や予祝行事など、季節的祭事の日。すべて旧暦によって日が定められている。

＊ミセセル…沖縄諸島に伝承されてきた祝詞の一部門。『おもろさうし』『琉球国由来記』碑文などにみえ、ミセセル、ミセゼル、ミスズリなどと記される。「神のみせせる」などとあり、神の託宣・神託と意識されていたらしい。

伊是名村の祭祀場

神アシャギ

神アシャギ（アサギ）は、麦大祭（旧暦3月15日）、稲大祭（旧暦6月15日）、ウンジャミ（旧暦7月18日）といった豊穣・豊漁祈願など、さまざまな村落祭祀を執り行うための建物。

外見は８本の石の柱の上に直接屋根が載る造りになっており、壁や床はない。地面と屋根の間のすき間はわずか80センチほどで、これは、神事が行われる場所なので人が入る時に必ず頭を下げるような高さになっているとも言われる。茅葺きの伝統様式を備えているアシャギは諸見・仲田・伊是名・勢理客にそれぞれ１軒ずつあり、沖縄県の有形民俗文化財となっている。

【火の神とアシャギ】

稲作に関する行事は、ムラの旧家の火の神とその庭に建てられたアシャギで行われる。そこに神を迎えてもてなし、豊作の感謝と来期の祈願をする。アシャギは各字にあるが、特に仲田のアシャギ家は「地頭代火の神」といわれ、現在も村長就任の報告と村政が円滑に遂行されることを祈願するという。しかし、かつて旧家の上座にあった火の神は、現在では別棟を建てて移している例が多い。

＊火の神（ヒヌカン）…火所の神であるが、沖縄地方ではそれよりも家の神としての守護神的な性格が強い。婚出の際には、母親のまつるヒヌカンの香炉の灰を婚家に持参して新たに祀る。こうした民家の火の神とは別に、各村落の火の神がまつられ、神女による祭祀が行われる。

8 諸見の神アシャギ
2013年9月13日撮影

9 仲田の神アシャギ
2013年9月13日撮影

10 伊是名の神アシャギ
2013年9月14日撮影

11 勢理客の神アシャギ
2013年9月14日撮影

12 勢理客の神アシャギ火の神
（拝所） 2013年9月14日撮影

13 勢理客の神アシャギ火の神
1980年8月26日撮影

屋那覇折目

旧暦７月16日に行われる儀礼。屋那覇島とは伊是名島の南西１㎞にある島で、この祭祀について、琉球国の地誌『琉球国由来記』(1713年）に次のように記す。

「屋那覇折目」　七月、島中ニテ日撰仕申。遊二日ノ事。
右、屋那覇ト云フ小離有之。作物ノ為ノ願トテ、神酒食肴、相調、伊是名城ノ前ニ座拵仕、ノロ・掟神申請、屋那覇江向テ、御祭仕リ…（中略）…昔ヨリ傳仕ルコトニテ、由來不傳。」(巻16)

これによると、屋那覇という小さな離島があり、由来は不明ながら、作物のための祈願として神酒、肴を調え、伊是名城の前に座拵えをして祭をするという。ちなみに、城の初代城主は伊平屋島出身の佐銘川大主（さめがわうふぬし）で、琉球を統一した尚巴志の祖父にあたる。

1980年の調査時には、午後から、伊是名城麓の道路脇にある御番屋（おばんや）に神女とサンナームたちが集合して、元島のチュムトゥデークという野原に移動した。この野原から屋那覇に向いお通し（＝遙拝）をする。
カーサ餅とソーメンを供えて拝んだ後、会食。その後、花米(*)を神女に分配して終了した。
＊花米…拝みに使う米。

カーサ餅

14 麓のモトジマ　神事の準備
1980年8月26日

15 麓のモトジマ　神女の会食
1980年8月26日

16 伊是名・諸見のシドゥ神が
伊是名ナー遙拝の準備
1980年8月26日

17 伊是名・諸見のシドゥ神が
伊是名ナーを遙拝
1980年8月26日

旧暦7月17日 伊是名島のウンジャミ　　1980年8月27日調査

伊是名村のウンジャミについて、『琉球国由来記』(1713) は以下のように記す。

「海神折目」　十一月島中ニテ日選仕り申、遊一日ノ事
右海ノ神御祭用ニ、神酒肴餅、相調、伊是名、城御イベ前ニ、ノロ・掟神申請、御祭仕リ、ヲエカ人、サバクリ、御拝四ツ仕也。由来不伝。(巻16)

同書では11月の祭とするが、いつの頃からか時期が７月に変わり、定着したらしい。祭祀の内容はあまり変化はないようで、伊是名城趾（グシク）にある各字のアサギナーで各神職による拝願が行われるとする。

調査時には、グシクにある諸見・仲田のナーと勢理客ナーで拝みが行われ、伊是名ナーは麓のモトジマでお通し（遙拝）が行われた。伊是名ナーへは道が危険であるため、お通しの祭祀で代えているとのことだった。一種の簡略化だが、ウンジャミそのものが伊是名城跡内で完結する点は変わっていないと言えるだろう。

祭祀の記録　(14:00頃～15:30頃まで)

伊是名城麓の道路脇にある御番屋（おばんや）に関係者が集合、14時頃からグシクに上り始める。参加する神職は以下の通り。

- **オトコ神（諸見、女性）**
- **ウチ神（仲田、女性）**
- **マニカニ神（勢理客、女性）**
- **シドゥ神（諸見、女性）**
- **シドゥ神（伊是名、女性）**
- **根神（伊是名、女性）**
- **ワチ神（勢理客、女性）**
- **アガリジミー（諸見、男性）**
- **アマイ神（勢理客、男性）**
- **仲田のアマイ神代理**

他に、サンナーム（供物の準備や神職者の物持ちをしたりする役の一般人）が各字から1名。その一人が手に弓と矢を持つ。

⇓

大城のナー（＝諸見・仲田のナー）に到着し、神衣裳に着替える。
＊勢理客のアマイ神とサンナームは勢理客のナーへ向かう。
＊アガリジミーと仲田のアマイ神代理はシヌグ小屋を作る

⇓

大城のナーでの拝み。(諸見のシドゥ神と仲田のウチ神が中心。)
供物２盆と板香、弓矢、ウンジャミ餅を供え、餅と諸見からのおかゆを全員で食す。
アガリジミーが拝み（四拝*）を行う。　　＊四拝…立って合掌、座って伏す拝礼を一拝として４回行う。

⇓

勢理客のナーへ移動し、拝み。(神人は海に向かって一列に並ぶ。)
拝みの後、ウンジャミ餅を分配。神女たちは神衣裳を脱ぎ、下山。

⇓

グシクの麓に戻り、モトジマ・ウエジマ（ともに元伊是名集落のあった場所）へ向かう。ウチ神が玉御殿に拝礼。
モトジマのチュムトゥデークでは、伊是名と諸見のシドゥ神が伊是名のナーへのお通し（＝遙拝）を行う。２人はウエジマで皆と合流して、グシクに向かって座る。

⇓

サンナームがウンジャミ餅を神人達に供え、続いて飲食。
アガリジミーとアマイ神の男神２名が四拝。供物を分配して終了。

1980年8月27日撮影（18～33）

18 大城のナー（諸見・仲田のナー）
の拝所（伊是名 城山）

19 ススキの葉でお祓い

20（左）・21（右）
明日のシヌグのための「イエ」作り

22 供物の準備

23　大城ナー前（ハーヌメー）で拝み

24 拝みの後、お粥を食す

25 マニカミ神に供物の
ウンジャミ餅を捧げる

26　アガリジミーによる四拝

27 お供えの板香と作り物の弓矢

28　勢理客ナーへ移動

29　勢理客ナーの拝所

30 勢理客ナーで拝み

31 グシク麓
仲田のウチ神が玉御殿に拝礼

32 モトジマ　伊是名・諸見の
シドゥ神は供物を捧げる

33 モトジマ　伊是名・諸見の
シドゥ神は伊是名ナー遙拝

ウンジャミ

沖縄で海の彼方にあるとされる他界「ニライカナイ」から来訪神を迎え、豊作や人々の健康、村の繁栄などを予祝する行事。名称を字義通り解せば来訪する神は「うみがみ」すなわち海神で、それを祀る儀式がウンジャミということになる。祭祀名は、ウンギャミ、ウンガミ、ウンザミなどとも言う。

この祭祀は、奄美の一部を除くと、沖縄本島北部およびその周辺離島のみに分布している。これらの中でも毎年ある地域と、シヌグと隔年ごとの地域がある。行われるのは旧暦７月だが、日については、最初の亥の日（本島安波・安田)、伊平屋と伊是名は17日、その他はお盆後の最初の亥の日と、地域によって３通りに分かれる。

儀礼は、祭の前に女性神職が集落の根屋や神アシャギに籠って来訪神を迎える準備を行い、当日は神アシャギにて踊りや船漕ぎ、弓を射る所作などの神遊びをし神の祝福を受け、最後は海辺で神をニライ・カナイへ送るというかたちのものが多い。儀礼の内容や形式も地域ごとに違いはあるが、来訪神を迎え作物の豊作を祈るということでは共通している。

＊「沖縄祭祀資料データベース」には、伊平屋島の田名、本島の塩屋・安波・安田、古宇利島のウンジャミが収められている。(別掲写真)

各地のウンジャミ

82 伊平屋島田名 アカシハマでの儀礼
1984年8月13日

83 本島安波 アサギナーで儀礼
インコー（猪・魚を突く所作）
1986年8月11日

84 古宇利島 シチャバヤーでの儀礼
1989年8月19日

85 本島安田 アサギマーの砂場で儀礼
ヤマシトエ（猪取り）1986年8月11日

86 本島塩屋 屋古アサギでの儀礼
神ウスイ　1989年8月19日

87 本島塩屋 屋古スルガンサ
ハーリ船競争　1989年8月21日

旧暦7月17日 伊是名島のシヌグ

1980年8月27日調査

伊是名村のシヌグについて、『琉球国由来記』(1713) は次のように記す。

「シノゴオリメノ事」　七月、島中ニテ日撰仕申遊一日ノ事
右アクマハライトテ、男童十人程、アマミ人カ壱人、衣、祠、袴着テ、白サジ、シレタレ、結ビシテ、手々ニ棒ツキ、アマミ人、並、廿日ノ、年ナフリノ人、弓矢持、先立仕、オナジャライハウハウ、ヒーヌーネーハウハウト唱エテ家々ニ入リ、島ノニシ崎マデ行テ、ネゾミヲ取リ、年ナフリ持タル、矢ノサキアテ、海ニ入レ捨テ、村ニ帰リ、一所ニ寄合、神酒持寄祝申也。

同書で「悪魔祓い」とするシヌグは、男児10人程がアマミ神に先導され、棒を持って「オナジャライハウハウ、ヒーヌーネーハウハウ」と唱えながら家々を回るとあり、概要はほぼ変わらず伝えられているようである。ただ、後半のネズミを採ったりする部分は、勢理客のみで行われており、他の字では行われていなかった。

同書ではウンジャミは11月の祭りとされていたが、いつの時代からか７月に定着し、シヌグの前日に行われている。先に見たように、ウンジャミの途中、大城ナーで儀式の準備をしながらシヌグで使う小屋を作ったりもしており、今は連日の祭祀でひとまとまりという感が強い。

シヌグは、ウンジャミとは違って、各字で同時進行のかたちで行われる。中心となる各戸廻りの儀礼は、どこでもほぼ同じように行われる。ここでは諸見の事例を詳細にあげ、他と比較しよう。

ちなみに子供の掛け声は下記の通り、各字で微妙に異なっていた。

諸見「ウナジャレネー　ホッホッホー　イーヌーネー　ホッホッホー」
仲田「ウナジャーレ　ホーホー　ヒーヌーヌ　ホーホー
　　チントゥク　マントゥク　トゥイトゥイトゥイ」
伊是名「ウナジャレ　ホーホーホー　ヒヌメ　ホーホーホー」
勢理客「ウナジャーレ　ウナジャーレ　ヒヌネノホイ」

祭祀の記録

諸 見　参加男児10名

7：50　シザヌヤー管理者の高良氏がシザヌヤー拝所の戸を開く。
9：50　諸見のシドゥ神がシザヌヤーに到着。
シザヌヤーでは、お供えのオハツ（＊米と砂糖を水で溶いた白濁の飲み物）が作られる。シドゥ神はオハツを供え拝礼。

10：10　シドゥ神はウェーザナシーに移動。区長が線香を供える。

8：30　アマイ家（アマイ神の自宅）に男子10名集合。アマイ神（＊今回は代理）の指導によって、以後のシヌグ行事は進められる。
＊子供達の服装は、白ハチマキ・白シャツ・白の半パンツ・白の襷。
手には1m20cm位の棒を１本ずつ持っている。(全字同じ)

9：00　アマイ家を出発しグシクに向かう（移動は軽トラ)。

9：20　御番屋（グシク麓）到着。オハツを皆で頂く。

9：30　グシクの大城ナー（諸見・仲田のナー）に到着し儀礼。
・子供達はⓐ掛け声をかけながら岩を反時計回りに３回廻る。
・ナー奥の泉（イシカー）で、ⓑ掛け声をかけながら棒（グーサン）で水面を３度打つ。
儀礼を終えて神格化した子供達は、下山する。

9：40　チンシガニク（＊御番屋から約100m 離れた林）の中を、子供たちがⓐ掛け声を掛けながら左回りに３度廻る。

9：50　ニシモリ（＊諸見と仲田の中間地点にある拝所、仲田ではシヌグムイと呼ぶ）で、子供達が茂みの中をⓐ掛け声を掛けながら左回りに３度廻り、さらに、ⓒ（掛け声をかけながら）手にした棒の先を地面の一点に集め、それを中心に全員が反時計廻りに廻る。

10：00　諸見の集落に戻り、子供達による「各戸廻り」。
＊子供達は掛け声をかけながら、各家の客間から勝手口までを、手にした棒で床をつきながら土足で駆け抜ける。

10：20　各戸廻りを終えた子供達が公民館前に戻ってくる。
10：30　休憩後、スンジャカー（潮平川）に向かう。
＊潮平川は、尚円金丸の産水に使用されたという。

10：40　スンジャカーに到着。子供達がⓑ掛け声とともに水面を棒で３度打つ。その後、スンジャカーの反対側にある茂みへ駆け込む。アマイ神代理は茂みの出口（ハミグイ）で待ち、ここでは子供達は道路脇のⓓ地面の一点を掛け声とともに棒で３度打った。

10：50　シヌグガー（＊諸見から役場へ向かう道路脇の畑の中にある泉）に到着、子供たちはⓑ掛け声とともに水面を棒で３度打った。

11：10　ガナハの井戸に到着。付近は埋め立てられて位置が分からず、やむなくそうと思われる場所を井戸と見なし、子供たちはⓑ掛け声をかけて水面（と見立てた場所）を３度棒で打った。更にニシモリと同様、ⓒ棒先を一点に集めて皆が反時計回りに廻った。

11：38　イャーウー（土帝君とも）という拝所に到着。小さな祠があり、子供達は祠の周囲をⓐ掛け声とともに反時計回りに３度廻る。その後、祠の前でアマイ神代理の軍配による相撲をとる。
（＊諸見以外の他の字では相撲の前に、棒で打ち合う儀礼がある。）
＊公民館前出発からこの相撲に至る間、一般住民の参加はない。

11：40　諸見集落に戻り、四つ辻角のウェーザナシーに到着。
シドゥ神が白衣裳（ドジン）に白鉢巻の正装で拝みを行っている。
＊ウェーザナシーとは甘藷を伝えた人物とされる。建物はないが、神の依代とされる石が大樹の傍にあり拝所と見られる。前には３畳ほどの平地がある。その平地にゴザが敷かれ、シドゥ神、公民館長、子供の親たちが集まり、板香・神酒・オハツ・ロウソク・赤飯が供えられている。
シドゥ神の拝みの後、赤飯とオハツが全員にふるまわれ、子供達も昼食。

12：20　ウェーザナシーがある四ツ辻の中央で最後の儀礼。子供たちはⓒ掛け声をかけながら、地面の一点に棒先を集め、その棒先を支えに反時計回りに皆で廻る。アマイ神代理と区長は料理用のボールを打ち鳴らし、シドゥ神も手を打ったりと子供たちを盛り上げる。

12：25　子供達の儀礼は終了。神職は「四カ通イ(シカドゥイ)」へ。

34　シザヌヤー火の神祠内部

35 諸見のウェーザナシー全景

36 大城ナー　「イエ」と
岩の周囲をまわる子供たち

37 ニシモリ(シヌグムイ)の
茂みをまわる子供たち

38 ガナハの井戸で棒を一点に
集めてまわる子供たち

39 イャーウー（土帝君）で
相撲をとる子供たち

40 諸見のウェーザナシーに集合、
シドゥ神が拝礼

41 ウェザナシー横の四つ辻で
最後の儀礼

1980年8月28日撮影（34～41）

仲　田（「ウナザーレ」）　参加男児８名　＊諸見の事例に近似

＊赤色の英字を付した儀礼の内容は、諸見の事例を参照。

9：00　区長の「今からウナザーレをするので集合」という掛け声で公民館前に集合。（＊仲田ではシヌグではなく「ウナザーレ」と言う。）
アマイ神は諸見と兼務のため、区長が代理で行う。
9：45　皆でアシャギに向かう。行事の無事終了を祈り、移動。
10：00　伊是名城に到着。大城のナーで儀礼（ⓐ・ⓑ）。
10：25　シヌグムイ（＊諸見ではニシモリ）での儀礼（ⓐ・ⓒ）。
10：35　アシャギに帰る。火の神を拝む。アシャギでおかゆを食す　休憩後、子供達は踊らされたり、歌わされたりする。
11：50　チンシガニクでの儀礼（ⓐ）。アシャギからおかゆが届く。
12：05　アンジャナシー(＊仲田の公民館の南側にある拝所)で儀礼（ⓐ）。
その後、各戸廻りに出発。仲田の各戸廻りでは、他の字とは逆に、家の勝手口から入って玄関へと走り抜ける。自分の担当場所を廻ると、随時解散。神職は諸見アシャギへ。

子供達による儀礼について（諸見・仲田）
ⓐ掛け声をかけながら、反時計回りに３回廻る。
ⓑ　掛け声をかけながら、棒で水面を３度打つ。
ⓒ　掛け声をかけながら、棒の先を地面の一点に集め、それを中心に全員が反時計廻りに廻る。
ⓓ　掛け声とともに地面の一点を棒で３度打った
事例としてはⓐ・ⓑ・ⓒ・ⓓの４つになるが、パターンとしては、
ⓐとⓒ、ⓑとⓓは同じ系統と見なせよう。

この儀礼の内容については、次のような言い伝えがある。昔、尚円王の妻が宮仕えを疎み、島に逃げ戻って姿を隠した。その貴婦人を捜し求める行為だという。あるいは、昼寝をしている貴婦人を起こしてまわるのだと説明した住民もあった。
また、掛け声にある「ウナジャレネー」ということばを、おもろ(*)語の「オナジャラ」（位の高い女性の意）と関連させる説もある。

＊おもろ…琉球古代の歌謡。神事や宮廷の祝宴などに謡われた叙事詩。

42 伊是名グスクの全景（左下に玉御殿）
2013年9月13日撮影

伊是名　参加男児７名　＊各戸廻りは古態を残すか。

8：45　ソウザアシャギ前に子供達が集合。
9：00　アマイ神不在のため、脇神である銘苅氏がアマイ神代理となる。アマイ神代理の先導で子供たちはグシクに向かう。
9：05　モトジマで伊是名ナーへ遙拝後、伊是名の村のソウザ火の神(＝伊是名アシャギの火の神)へ移動し、ソウザの火の神を拝む。
ソウザ火の神の前で棒術の稽古。
アマイ家へ移動。アマイ家の客間から入り、棒で叩きながら、勝手口から庭に出る。庭で棒術を行い、その後、相撲を取る。

9：47　アシャギ横で村内を廻る順番を決めて、各戸廻りに出発。
＊伊是名では「アガリンドゥ（東組)」「イリンドゥ（西組)」の二手に分かれ全戸を廻る。
各家では客間から入って勝手口へと駆け抜けて庭へ出る。その間、家人は家の外に出てそれを見守る。庭では、グーサン（棒）で打ち合った後、相撲を取る。各家の住民からご祝儀を貰う。

12：05　各戸廻りの後、全員ヌルドゥンチに集合し、昼食。
アマイ神代理はおかゆを受け取り火の神に供えた後、子供達に配る。
火の神の前で拝みの後、子供達は海に行き、禊ぎをして解散。神職は諸見アシャギへ向かう。

1980年8月28日撮影(43～49)

43　麓のモトジマで
伊是名ナー遙拝

44 伊是名の神アシャギ
火の神に拝礼

45 各戸廻り
家々へ向かう子供たち

46 各戸廻り
家の中を駆け抜ける子供たち

47 各戸廻り 庭で棒術を披露

48 各戸廻り 住人に祝儀を貰う

49 ヌルドゥンチに集合し
アマイ神代理からお粥をもらう

勢理客　参加男児12名　　＊虫除けの要素を持つ儀礼を遺している。

8：30　神アシャギ前に集合。アマイ神も参加するが、子供達の指導は勢理客アシャギの長男、諸見氏が担当。アシャギの石塀には、ネズミを藁で巻いた藁筒が指してある。
男児は棒術と相撲の練習をし、各戸廻りの要領と掛け声を教わる。

10：30　神アシャギを出発。先頭は太鼓を叩くアマイ神代理と区長。

10：40　トヲソク池（＊集落内のシヌグムイ、ウナジャーレグムイともいう）に到着。東西に分かれ池を囲み、小太鼓に合わせ掛け声をかけ合う。

10：45　子供たちは分かれて担当の各戸廻りへ。
アマイ神代理は、ネズミの藁筒を持って前兼久（メーガニク）に向かう。ここには前日に土俵が作られており、字民が集まっている。

10：50　各戸廻りを終えて到着した子供達は、土俵を一周し東西に分かれる。身長の低い順に取り組みが行われ、棒術、相撲を披露。
終了後、海岸のシヌグムイ（長浜の海岸）に向かう。先頭の子がネズミの藁筒を持っている。

11：20　海岸のシヌグムイ到着。二つに分かれて、年長の者は海を渡って沖の岩へ、幼少者は浜に近い岩に上る。沖の岩に向かう者がネズミの藁筒を持って行く。藁筒は船のようにしつらえてあり、沖の岩場から海に向かって流される。
その後、沖側と浜側の岩場で「ウナジャーレ…」の掛け声を３回ずつ交互に掛け合う。１回掛け声をかける度に棒を振り下ろす。

終了後　アマイ倉（＊シヌグの時にだけ使う拝所）に向かう。

アマイ倉に、ジィマ屋（区長）、アシャギ管理者（諸見氏）たちと子供達が集まり、ミチ（＊米を臼で摺って砂糖を入れる）とハチチ（＊米の粉を葉っぱで包み、蒸したもの）、スイカが配られる。
食した後、アマイ倉前とクラムイの前で、掛け声と共に棒で地面を叩く。その後子供たちに歌を歌わせたりして最後にタオルを渡す。

11：50　子供達の行事は終了、解散。神職は諸見アシャギへ。

1980年8月28日撮影（50～61）

50 勢理客アシャギの塀
ネズミ入りの藁筒

51 勢理客アシャギ家の前で
棒術の練習をする子供たち

52 勢理客アマイ家から
一行出発

53 勢理客のシヌグムイ
掛け声を掛けて棒で叩く

54 勢理客メーガニクで
棒術の試合

55 勢理客メーガニクで
相撲をとる子供たち

56 海岸のシヌグムイに一行到着

57 ネズミ入り藁筒を船に仕立てる

58 沖でネズミの船を流す

59 海岸のシヌグムイ
沖の岩から掛け声をかける

60 海岸のシヌグムイ
浜寄りの岩から掛け声をかける

61 勢理客アマイ倉で儀礼
神酒とハチチをもらう

四カ通イ（シカドゥィ）

「四カ通イ」は、諸見・仲田・伊是名・勢理客の四字のアシャギ庭（アシャギナー）廻りをすることをいう。シヌグの他にも、四祭（旧暦２・３・５・６月に行われるウマチー(*)など主要な祭祀の際に行われる。四字のアシャギ廻りのほかに、アガリズミの火の神、勢理客の「前のモーヤ」「後のモーヤ」の火の神も廻ることになっている。

（＊ウマチー…村落で豊穣祈願・感謝、集落の繁栄祈願をする行事。麦と米の初穂と収穫の　　時期に行われ、２月が麦穂祭、３月が麦大祭、５月が稲穂祭、６月が稲大祭にあたる。）

シヌグの時は、諸見の子供たちのウナジャーレが終わった後、シドゥ神は諸見の神アシャギに向かう。そこには各字の神女とアガリジミーが集まっている。神前の供物などはすべて他の祭祀の場合と同様である。神女たちは白衣装で、この時シドゥ神も白鉢巻は外している。神女達は拝礼を行い、その後、男神のアガリジミーがミスパイ（三十杯）を行い終了する。その後、仲田、伊是名、勢理客の各神アシャギを順番に廻っていく。

「四カ通イ」の最後の勢理客アシャギに集まった神人たちは、諸見のシドゥ神、勢理客のマニカニ神、仲田のウチガミ、仲田のシナドゥル神とアガリジミーである。アシャギでは神女たちは白の神衣裳（鉢巻はしない）である。他のアシャギでの時と同じように、神女たちが拝みを行い、男神のアガリジミーはミスパイ（三十拝）を行い終了する。神酒と供え物が配られ直会となる。

64 伊是名の神アシャギ　供物分配

62 勢理客の神アシャギ　拝礼
（右からマニカミ神とウチ神）

63 勢理客の神アシャギ
アガリジミーのミスパイ（三十拝）

65 伊是名の神アシャギ　神酒交換

1980年8月28日撮影（62～65）

シヌグ

シヌグは、沖縄本島北部及び周辺離島で旧暦７月のお盆前後に行われている年中行事で、シニグ、シニグイなどとも言われる。『琉球国由来記』には各地の「シノゴ折目」の記述があり、農作物に虫がつかないように祈願し、またあらゆる害虫を捕り集めて海に捨てることなどが記されている。

地域によってその内容や祭祀の形式はさまざまだが、形態はおおむね、村の男性たち（男児も）が村の御嶽などの神聖な場で神となり（仮装する場合も）、村に下りて家々を廻って厄を払い、祝福するというかたちをとる。男性たちは掛け声を上げながら集落を廻り、手に持った棒や木の枝で家の床や壁をたたいて厄を祓い清める。

【シヌグの語源】シヌグとは、国語の「凌ぐ」で、文字通り台風、干ばつ、悪疫などさまざまな災難を祓い凌ぐための祭りであると解されることが多い。実際に、シヌグには祓いの祭儀があるので、そのように理解されるのであろう。

沖縄最古の歌謡集『おもろさうし』に「しのくによわる」（＝美しく踊り給う）、「しのこて」（＝美しく踊って）などの用例があり、シヌグとは祭式舞踊を意味する言葉とする説もある。

＊「沖縄祭祀資料データベース」には、伊計島、伊平屋島の田名、本島の安田・備瀬・具志堅・辺名地のシヌグが収められている。（別掲写真）

各地のシヌグ

88 伊平屋島田名　午後の儀礼
田名殿内で神酒の接待
1989年8月15日

89 本島備瀬　ニーヤーでシニグ節
1992年8月18日

90 伊計島　ハールマーイ
道脇で拝礼　1989年8月2日

91 本島安田　アサギマーでの儀礼
タークサトエ（田の草取り）
1985年8月16日

92 本島具志堅　イナグヌユバイ
お宮で拝礼　1992年8月17日

93 本島辺名地　アサギナー
ウスレーク（ウスレ踊り）
1994年8月29日

伊是名島の豊年祭（八月遊び）

「遊び」とは休日のことをいう。旧暦８月はまつりと芸能の季節である。６月の稲粟の収穫と祭り、７月のお盆とそれに続く「シヌグ」「ウンジャミ」の行事があり、夏の最後を締めくくるのが８月の一連の行事であった。伊是名島では８日からは８月の遊び日に入るとされ、豊年祭の準備が始まる。旧暦８月10日の「柴差」から十五夜までは、「柴差」（大折目）、「イルチャヨー」などの神事とともに各集落で豊年祭が行われ、各種の芸能が披露される。

柴差し（大折目）

「柴差し」は沖縄各地で旧暦８月に行われる物忌み行事。シバとはススキの葉と桑の小枝を束ねたもので、それを家屋の四隅、門、トイレ、家畜小屋、井戸、水瓶や味噌瓶、種物を入れた容器に挿し、悪霊の侵入を防ぐ。夜はカンチーと呼ばれる小豆入りの強飯と酒肴を火の神や仏壇、神棚に供え、無事息災を祈る。八月折目（ウイミ）あるいは八月カシチーとも言われ、地域によって８月９・10・11日に行う。

「柴差」は『琉球国由来記』には８月の公式祭礼として見え、日取りがあらかじめ王府から通知され、２日間にわたって儀礼が行われた。王府においては、ある種の「正月」として位置づけされる重要な儀礼であった。この柴差祭は後に（1735年）10日に定日化されて今に至る。

伊是名島では9日から10日かけては、各家で「カシチ折目」「大折目」の行事として、霊前に赤飯を供えたり、田や畑、家の蔵や諸道具に「柴」を挿し、赤飯を食べる。「柴」は人間も身につけた。男は耳に、女は髪に挿したという。10日は「大折目」の儀礼として、すべての神女が参加して各アシャギを巡行する（四カ通イ）。さらに翌日はイルチャヨーの儀礼が行われる。勢理客の神女は、この晩はアシャギに籠もって翌日のイルチャヨーの神歌を練習する。

旧暦８月11日の朝、門の脇や車などさまざまな所に挿された柴

。

神アシャギの屋根に挿された柴

2013年9月14日撮影

イルチャヨー

旧暦８月11日に行われる儀礼。昼前、男女神職が勢理客の神アシャギに集合する。ノロが関与する行事はほとんどが諸見を出発地としているが（＊シヌグの「四カ通イ」参照）、「イルチャヨー」の行事だけは、逆に勢理客アシャギから出発する。（アムガナシは参加せず、伊是名ノロ以下の各村の神女と男神が行うのが本来の姿だったらしい。）儀礼は、基本的には前日の「大折目」儀礼に、イルチャヨーの神歌を歌う場面が付け加えられたかたちとなる。

また火の神の拝礼が行われるのは勢理客の東ゴーザの祠と、仲田アシャギの火の神だけで、他は庭（ナー）廻りである。ミセセル（神のことば）で舞踊が行われるのもこの祭りだけで、勢理客アシャギ庭（ナー）と、勢理客東（アガリ）ゴーザの祠前、伊是名のアムガナシ御殿庭で行われる。

当日、勢理客の神アシャギでは、火の神に供物を捧げ、神アシャギ内で拝みの後、神女が「イルチャヨー」の神歌を歌い、踊る。（＊2013年調査時は踊られなかった。）

次は、集落内の「東ゴーザ」に移動し、拝礼のあと、前の広場で神女と男神が「イルチャヨー」の歌舞をする。その後は勢理客の村芝居（豊年祭）の全出演者が広場に繰り出し、神前に舞踊を奉納する。これを「入端（いりは）」という。ミルク面をかぶった横に数人の稚児が並び、男子の四つ竹踊りを先頭に円陣を作って左廻りに回りながら踊る。（「南嶽節」「加那ヨー」などの５曲。）最後は神女も仲間に加わって踊り、カチャーシーで締めくくる。

ここからは伊是名に向かう。伊是名では、アムガナシ御殿の庭で同じ歌舞が演じられる。その後、伊是名の神アシャギへ向かい、同じく拝みをする。ここではイルチャヨーは歌われない。

現在のイルチャヨーはここで終了となる。かつては、伊是名の神アシャギから、勢理客の神職のみは村に帰り、伊是名・仲田・諸見の神職は仲田から諸見まで巡行したという。ただし、いずれもイルチャヨーの歌舞は行われなかったという。

66 勢理客の神アシャギ火の神に拝礼

67 勢理客の神アシャギで拝礼

68 神女によるイルチャヨーの歌舞

69 ミルクの先導で武者姿の幼児入場

70 青年男女による「稲すり節」

71 子供たちによる棒術

72 全員による円陣歌舞

2013年9月14日撮影（68～72）

「イルチャヨー」の由来

茅葺きの屋根（棟の真頂（マチヂ））を風に吹き飛ばされないために、杙（くい）を６本（家の広さによって本数が異なる）前後左右から差し込んで黒綱で結わえておく。この杙（くい）をイルチャ（イルチャグーシともいう）という。このイルチャをヨリマシ（依代（よりしろ））としてイルチャ神は天降りすると信じられていた。祭祀の歌に「イルチャヨー、イルチャヨー」と連呼するのは、イルチャ神が天降りすることをためらっているのに対して、早く降りてきてくださいと促し迎える詞だろうとされている。

この「イルチャヨー」は航海安全を祈る祭り歌で、唐・南蛮行きの船出が行事化されたものだといわれている。琉球王国時代の進貢船や接貢船の船員には、尚円王（1470～1477）時代前後は、伊平屋島出身者が最も多かったという。彼らの航海安全を祈願した祭祀が「イルチャヨー」であった。これらの船員も後には各地から出るようになり、イルチャヨー祭も各地に広まったようだが、現在は伊是名島の勢理客と、伊平屋村の野甫島だけに残っている。

豊年祭（豊年踊り）

伊是名島では、この時期（旧暦８月８日～15日）に各集落で行われる豊年踊り（八月踊り・村踊り）は、今年の豊作を感謝し来年の豊穣を祈願するもので、「柴差し」や「イルチャヨー」など連の神事も組み込んだかたちで行われる一大行事である。一般住民も芸能を披露するこうした「豊年祭」は奄美地方などでも見られるが、いずれも当初は女性神職だけの神行事だったものが、次第に一般住民が参加するようになったものである。

伊是名島では、旧暦10日～12日に各集落の設けた舞台で盛大に行う。披露される演目は、伝統的な琉球舞踊である老人踊り・女踊り・若衆踊り・二才踊りなどから、組踊や狂言（寸劇）、民謡までさまざまである。また、屋外では各種舞踊やエイサー、棒術（棒踊り）なども行われる。以前は各集落で２日間は行われていたが、近年は１日（夕方から半日）と短縮されている。

73 （諸見）家まわり
エイサーや歌舞、棒術などを披露

74 諸見の「豊年祭」
オープニングのエイサー

75 仲田の「豊年際」
オープニングのエイサー

76（仲田）組踊「矢蔵の比屋」
悪役の矢蔵の比屋の登場場面

77 （仲田）組踊「矢蔵の比屋」
主人公・虎千代が敵討ちに向かう場面

撮影：2013年9月
15日（75～77）
16日（73・74）

豊年祭（プーリィ）

沖縄県八重山諸島において旧暦６月に収穫儀礼としておこなわれる祭を言い、プーリ、プーリィン、ポーリィーなどとも呼ばれる。

プーリィは二つの要素からなる。今年の収穫物の神への感謝と、来年の豊作予祝である。行事は２日間で、１日目は御嶽（オン）(*)（＝拝所）で収穫の感謝祈願をし、２日目は村中の者が集って予祝の儀礼をする。１日目は拝所でなされるので「御嶽プーリィ」、２日目は村をあげて行うので「ムラプーリィ」という。御嶽プーリィは、神職が各御嶽で祈願をし、稲・粟のミシャグ（神酒）と泡盛を神前に供え、ミシャグパーシィと呼ばれる儀式がなされる。

一方、ムラプーリィは村民が予祝儀礼を行うが、村によって、旗頭・太鼓・巻踊りをして綱引きをする所（石垣島白保・大浜・平得・真栄里・四箇、西表島粗納・干立、与那国島など）、船漕ぎや種々の芸能をする所（黒島など）、来訪神を迎える所（西表島古島、小浜島、新城島上地、石垣島宮良など）などと違いがある。なお、来訪神迎えの儀礼は当事者だけで行い部外者には公開されないアカマタ・クロマタのような事例もあり、秘祭とされている。

＊御嶽（オン）…村落祭祀の中核となる聖域の総称。沖縄本島では、ウガン、ムイ、ウタキなどと呼ばれる。

＊「沖縄祭祀資料データベース」には、石垣島の川平・四箇・大浜・白保、西表島の祖納、宮古島の新里の豊年祭が収められている。

各地の豊年祭

78 石垣島 四箇　村プーリィ
ナースク・オン 奉納行列
1981年7月24日

79　石垣島 大浜　オンプーリィ
夜の儀礼　1982年8月10日

80 西表島 祖内
綱引き道路での棒術披露
1986年7月29日

81　宮古島 新里
マツブドウツカサヤーでの歌舞
1993年7月27日

「沖縄祭祀資料データベース」について

平成19年（2007）４月、古典芸能研究センターでは、沖縄祭祀の記録写真をデジタル化して構築した「沖縄祭祀資料データベース」をホームページ上で公開しました。

もとになった写真は、沖縄祭祀研究会（甲南大学地域文化研究会内、沖縄祭祀に関する研究会）から寄贈された資料です。その内訳は、昭和53年（1978）から平成10年（1998）に至るまでの調査記録（写真8,500枚あまりと各種調査資料）で、収録祭祀は30種類35件に及びます。また、地域も北は伊平屋島、南は波照間島、西は西表島と、広範囲にわたっています。

「沖縄祭祀資料データベース」では、これらの貴重な調査記録を祭祀別に日程・行事の進行に従って整理し、それぞれの「祭祀日程表」として掲げました。祭祀によっては複数回調査のなされた事例もありますが、基本的にはこの日程表は１回ずつの記録となっています。さらに、各祭祀内で行われる儀礼などの写真を、時間の流れに沿って表とあわせて閲覧できるようにしました。祭祀については、「地図からの検索」及び「祭祀一覧表からの検索」画面から、地域別・祭祀種別のアプローチもできます。データベース内の解説文などに含まれる言葉については、任意のキーワードから検索することができ、対応する写真がすべて抽出されるようになっています（「キーワードからの検索」）。

また、調査時の音源・映像のデジタル化や英文ページの作成も進めており、試験的に公開しています。さらに、こうしたデータ整理の一方で、現地での新たな追跡調査や資料収集も行い、補足と充実をはかり、データベースの更新作業を進めています。

今回新たに加わった伊是名島のデータは、データベース完成後に1980年の調査資料と写真が見つかり、新規ページ作成の運びとなりました。ご利用いただければ幸いです。

神戸女子大学古典芸能研究センターＨＰ　http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/

なお、同研究会の調査成果は、『沖縄の祭祀－事例と課題－』（三弥井書店 1987年）、『沖縄祭祀の研究』（翰林書房 1994年）としてまとめられています。伊是名島のウンジャミ・シヌグの調査報告もありますので、参考図書コーナーでお手にとって御覧ください。

〔参考文献〕

・中本弘芳編『伊是名村誌』（伊是名村役所、1966年）
・伊是名村史編集委員会『伊是名村史　上･中･下』（伊是名村、1989年）
・名護市史編さん室編『やんばるの祭りと神歌』（名護市教育委員会、1997年）
・諸見武彦『伊是名村勢理客誌』（末吉紀一、1999年）
・沖縄国際大学南島文化研究所編 『伊平屋・伊是名調査報告書』（沖縄国際大学南島文化研究所、1984年）
・『伊是名村勢要覧　いぜな』（伊是名村、2012年）
・鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』（岩波書店、1982年）＊大正15年(1926年)調査
・高阪薫編『沖縄の祭祀―事例と課題』（三弥井書店、1987年）
・高阪薫ほか編『沖縄祭祀の研究』（翰林書房、1994年）
・沖縄タイムス社編『おきなわの祭り』（沖縄タイムス社、1991年）
・渡邊欣雄ほか編『沖縄民俗辞典』（吉川弘文館、2008年）
・沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典』（沖縄タイムス社、1983年）
・琉球史料叢書第一・二巻『琉球国由来記』（上・下）（鳳文書館、1988年）

写真展
「伊是名のまつり ―ウンジャミ・シヌグ・豊年祭―」
展示図録

会場　神戸女子大学古典芸能研究センター展示室
会期　2019年６月３日（月）～8月30日（金）

編集　神戸女子大学古典芸能研究センター
（展示担当　非常勤研究員 大山範子）

〒650-0004　神戸市中央区中山手通２丁目２３－１